

## 資料・統計

## 2005年病理部業務統計

## Annual Report of Pathology in 2005

西村 広栄 阿部 康彦 栗原 アツ子 川崎 幸子  
 木下 律子 川口 洋子 泉田 佳緒里 佐藤 由美  
 北澤 綾 弦 巻 順子 畔上 公子 中島 亜希子  
 斉藤 芳弘 太田 玉紀 本間 慶一 根本 啓一

Kouei NISHIMURA, Yasuhiko ABE, Atsuko KURIHARA, Sachiko KAWASAKI,  
 Noriko KINOSHITA, Youko KAWAGUCHI, Kaori IZUMIDA, Yumi SATOU,  
 Aya KITAZAWA, Junko TSURUMAKI, Kimiko AZEGAMI, Akiko NAKAJIMA,  
 Yoshihiro SAITOU, Tamaki OHTA, Keiichi HOMMA and Keiichi NEMOTO

## 要 旨

2005年(1月~12月)病理部業務統計をまとめた。総依頼件数は23,130件で、内訳は病理組織診断11,974件、細胞診断11,117件、電子顕微鏡検索9件、病理解剖28件、遠隔診断2件であった。細胞診、組織診を合わせた術中迅速診は1,263件、院外受託は1,678件であった。業務件数は作製ブロック数49,275個、各種染色標本96,231枚であった。受け入れた研修生、実習生は総数20名であった。

2005年は総件数では前年比4%減であった。免疫染色は前年比5%増加の12,207件、また乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的検索HercepTestは17%の増加で621件となった。

## はじめに

2005年病理部業務統計を報告する。医療の高度化、癌治療の進歩に伴い病理部に対する要望も多岐にわたり、より高度で詳細な病理学的検索、あるいは情報の提供が求められるなかで最大限努力をしてきた。

また当院の理念でもある地域協力、人材の育成と言う立場から研修医、医学部学生、検査関連実習生を受け入れ、さらには中国からの研修生の受け入れ等可能な限り対応をしてきた。

## 2005年病理部業務件数(表1)

受付依頼件数は昨年に比し4%減少で総依頼件数は23,130件であった。組織診は11,974件で、細胞診は11,117件であった。2005年から肺癌喀痰検診業務の受託を取りやめたが細胞診件数はほぼ横ばいであった。院外受託は1,678件で、約3%の減少であった。

施設は12施設で、県立病院5施設(加茂病院、津川病院、坂町病院、新発田病院、吉田病院)、その他7施設であった。術中迅速診断は組織診、細胞診合わせて前年比約9%減の1,263件で、組織診は前年比約13%減の490件(延べ件数532件)、細胞診は前年比約7%減の773件(延べ件数947件)であった。術中迅速は日常業務と併行、あるいは中断して、数十分で標本作製から診断まで行わなければならない術式に影響する重要な業務の一つである。しかし、術中迅速細胞診は、処理から染色、鏡検までマンパワーをより要するため各手術室の依頼が重なる場合、日常業務の大きな負担となっている現状がある。今後は現状の精度を下げるこゝのない効率化の方法、またどうしても迅速でなければならない必要性を臨床側と考えていかなければならない。免疫染色は前年比5%増加の12,207件、また乳癌のHER2タンパクの免疫組織化学的検索Hercep Testは17%の増加で621件となった。

表1 2005年病理部業務件数

		総件数	組織診	細胞診	電子顕微鏡	病理解剖	遠隔診断
依頼件数	がんセンター	15,789	6,137	9,652	9	28	2
	がん予防センター	5,624	4,530	1,094			
	院外受託 <sup>1)</sup>	1,678	1,307	371			
	術中迅速(再掲)	1,263	490	773			
	(依頼合計)	23,091	11,974	11,117	9	28	2
業務件数	ブロック数	49,275	48,263		131	1,012	
	切り出し数	68,784	67,772			1,012	
	普通染色	78,420	58,609	18,791		1,020	
	特殊染色	4,912	3,290	1,474		148	
	免疫染色 <sup>2)</sup>	12,207	11,503	514		190	
	ISH染色 <sup>3)</sup>	53	53				
	Hercep Test <sup>4)</sup> FISH <sup>5)</sup>	621 18	621 18				
	(染色合計)	96,231	74,094	20,779		1,358	
実習生	研修医	7					
	医学部学生	3	新潟大学医学部				
	臨床検査学生	9	新潟医療技術専門学校 7, 北里保健衛生専門学校 2				
	中国研修生	1	中国黒龍江省臨床検査技師				
職員	病理医	3.1	常勤 3.0, 非常勤 0.1 (隔週 1日)				
	細胞検査士	8					
	臨床検査技師	2					

- 1) 院外12施設(県立病院5施設, その他病院・医院7施設)
- 2) 免疫染色では130種類以上の抗体を使用
- 3) In Situ Hybridization (ISH) によるEBウイルスの検索を行った
- 4) 乳癌のHER 2タンパクの免疫組織化学法での半定量的検索を行なった
- 5) FISH法による乳癌のHER 2遺伝子の検索

表2 2005年病理検査科別依頼件数

	総依頼件数	組織診件数 (%)	細胞診件数 (%)	電顕件数	病理解剖
内科	1,453	482(4.0)	949(8.5)		22
内科(がん予防 <sup>1)</sup> )	8	4(0.0)	4(0.0)		
神経内科	3		3(0.0)		
精神科					
小児科	703	348(2.9)	351(3.2)	2	2
外科	2,025	1,438(12.0)	582(5.3)	3	2
外科(がん予防 <sup>1)</sup> )	1,450	360(3.0)	1,090(9.8)		
整形外科	324	302(2.5)	20(0.2)	2	
脳神経外科	74	40(0.3)	34(0.3)		
呼吸器外科	675	301(2.5)	374(3.4)		
心臓血管外科					
内視鏡	573	107(0.9)	466(4.2)		
内視鏡(がん予防 <sup>1)</sup> )	4,166	4,166(34.8)			
産婦人科	6,491	1,282(10.7)	5,208(46.9)	1	
耳鼻咽喉科	438	243(2.0)	194(1.7)	1	
口腔外科	1	1(0.0)			
眼科	11	11(0.1)			
皮膚科	791	791(6.7)			
泌尿器科	2,212	787(6.7)	1,424(12.8)		1
放射線科	52	4(0.0)	47(0.4)		1
麻酔科					
院外受託 <sup>2)</sup>	1,678	1,307(10.9)	371(3.3)		
総計	23,128	11,974(100%)	11,117(100%)	9	28

- 1) (がん予防): がん予防総合センター
- 2) 組織診は主に消化管生検材料, 骨髄, 乳腺の受託  
細胞診は県立加茂病院よりで尿, 喀痰をはじめ材料は多彩

表 3 2005 病理組織部位別件数

	生検材料	手術材料	迅速材料	総件数	2004 年総件数	2003 年総件数
頭～頸部	110	73	10	193	239	262
甲状腺	2	63	1	66	93	63
気管支・肺	106	239	15	360	483	437
乳腺	400	496	8	904	876	754
肝臓	23	56	5	84	105	89
心・縦隔	6	11	5	22	27	50
膵・胆道系	0	200	65	265	249	236
食道	349	37	4	390	473	336
胃	2,742	319	37	3,098	3,207	3,320
十二指腸	172	35	1	208	193	153
小腸	19	11	0	30	43	35
大腸	2,299	269	2	2,570	2,793	2,637
腹膜・腸間膜	3	52	15	70	89	72
腎・副腎	0	78	0	78	103	78
膀胱・尿管	170	58	23	251	290	232
陰茎	1	3	2	6	7	10
前立腺	426	35	13	474	505	532
精巣	1	35	1	37	48	58
卵巣	1	248	51	300	299	236
子宮	726	358	19	1103	1028	857
骨・軟部組織	13	84	26	123	302	286
骨髄	939	0	0	939	917	840
皮膚	173	633	7	813	830	719
脾臓	0	30	0	30	32	33
リンパ節	62	1,400	222	1,684	1,828	1502
(合計)	8,743	4,823	532	14,098	15,059	13,827

※ 総件数, 生検材料, 手術材料は延べ総数を計上

表 4 2005 年細胞診成績

※ 延べ件数を計上

	件数	迅速	Class I	Class II	Class III	Class III a	Class III b	Class IV	Class V	検体不良	所見のみ
頭～頸部	57		2	38	3			4	6	1	3
甲状腺	324		4	253	9			4	36	14	4
気管支・肺	662	102	1	353	4			20	282	1	1
喀痰	760		6	675	29			18	56	4	1
肝・胆・膵	25	1		15	3			2	3		2
子宮頸体部	5,425		660	4,283	59	288	39	17	52	20	7
子宮断端部	653		241	379	4	13	2	1	12	1	
外陰部	12		2	6	2				2		
骨髄	27		5	17					5		
腫瘍	63	1	3	32	3			3	21	1	
リンパ節	65	1	13	2				1	40	6	3
心嚢液	3								3		
脊髄液	497	1	7	419	9			7	53		2
胸水(洗浄液含)	260	119	2	185	4			3	65		1
腹水(洗浄液含)	925	719	4	769	6			8	137		1
尿	1,598	1	43	1224	128			52	148		3
その他	17	2	1	10					5		1
(合計)	11,373	947	994	8,660	234	301	41	140	926	48	29

	件数	迅速	検体適正 (良性)	鑑別困難	悪性疑い	悪性	検体不適正	所見のみ
乳腺 <sup>1)</sup>	1,162		535	57	53	232	285	0

1) 乳腺は判定基準の変更で別計上

依頼件数がやや減少するなかで、これら遺伝子、免疫染色等の件数増加は臨床からのより詳細な情報の提供が求められている一つの現れであると思われる。

#### 2005年病理検査科別依頼件数 (表2)

組織診では11,974件中、予防センターの依頼が4,530件で約40%弱を占めた。消化器内視鏡が大半であったが、乳腺外来の生検数も年々増加し、前年比約20%増であった。本院件数では例年のごとく外科の件数が一番多く、続いて婦人科、皮膚科、泌尿器科の順であった。院外受託は1,307件で全体の約10%を占め、県立加茂病院、県立津川病院、佐渡総合病院の3病院で大半を占めた。

細胞診でも例年のごとく産婦人科が11,117件中5,208件で半数近くを占め、続いて泌尿器科、予防センター外科、本院内科、内視鏡(呼吸器)の順で依頼が多かった。院外受託は昨年同様371件で全て県立加茂病院の依頼であった。

電頭依頼は9件で、前年比約40%減少であった。また病理解剖依頼は28件で、前年比約20%増で、内科が主体であった。

以下、2005年病理組織部位別件数(表3)、2005年細胞診成績(表4)は業務内容をより把握していただく為、件数は延べ件数を形状する。

#### 2005年病理組織部位別件数 (表3)

部位別件数では延べ件数14,098件中消化器系が例年通り半数以上を占めた。生検材料でも消化器系が圧倒的に多く、続いて骨髄、婦人科系、泌尿器科系、乳腺、呼吸器系の順で、手術材料ではリンパ節、消化器系、皮膚科系、婦人科系、乳腺、呼吸器系、骨・軟部等の順であった。総件数ではとくに婦人科系、乳腺が前年に比し増加傾向大であった。迅速材料は延べ件数で前年比約10%強減少し532件であった。リ

ンパ節の割合が222件と大きく、うち乳腺、皮膚科系のセンチネルリンパ節としては129例で約60%弱を占めた。他部位では膵胆道系、卵巣、骨軟部、呼吸器系(気管支・肺等)の順に多かった。

#### 2005年細胞診成績 (表4)

件数は延べ件数12,535件であった。婦人科系が前年比約8%増加で6,090件と半数近くを占め、続いて尿、胸腹水、乳腺、喀痰、気管支・肺の順であった。乳腺は前年比約3%増の1,162件であったが、判定基準が異なるため別計上した。術中迅速細胞診は947件で前年より約2%減少した。内訳は胸・腹水が838件で圧倒的に多く、ついで肺・気管支の件数が目立った。なお迅速細胞診は現在通常の保険点数しか認められず、負担の大きい割に評価が低く、今後の保険点数増を期待したい。細胞診陽性(ClassIV, V, 悪性疑い, 悪性)は1,351件で10.8%であった。一方目的とする細胞がほとんど見られないような標本で検体不良、及び不適正としたものが333件で約2.7%であった。前年に比し73件少なく、割合も0.6%減少した。しかし前年同様乳腺が多く、約25%みられた。前年比約5%減少したが、乳腺の判定基準では10%以下が望ましいとされており、また検体不適正は再検査など患者への負担増につながることもあり、臨床側とも協力の上で採取法等総合的に原因を検討し、より一層の改善に努めていきたい。

#### おわりに

2005年病理部業務統計を報告した。依頼件数は約4%減少したが、免疫染色、遺伝子検索の件数が増加した。内容の濃い業務で大変な状況ではあるが、今後も臨床側の要望にできる限り応えられるよう努めていきたい。

最後に関係各位のご協力に感謝するとともに、今後ともよりいっそうのご協力をお願いしたい。